

総括討論

吉田和浩（広島大学教育開発国際協力研究センター教授）

ご来場の皆様、パネリストの皆様、熱心にご参加いただき感謝申し上げます。

このセッションを総括するにあたり、教育を改善するために地域の参加を推進する様々なアプローチがあることを再確認したいと思います。地域参加の目的は何か、何が可能で何が不可能か、文化的・歴史的・地域的な違いと共に様々なアプローチを明らかにする必要があります。これらの要素をすべてよく知ることが重要です。

地域社会とは何かについては議論してきませんでした、「地域社会」の意味を定義することも必要と思います。日本では、大都市のマンションでは隣にだれが住んでいるのかも知らないことがよくあります。それでも地域づくりというと、そのような人でも何らかの地域活動に参加していると言うかもしれません。しかし、それは本当に地域活動でしょうか。人によって地域社会や地域参加の定義も異なるかもしれないというのも興味深いことです。

これまで私たちは、この非常に興味深い話題について中身の濃い討論をしてきました。ここで今日のフォーラムについて、パネリストの皆様何か付け加えることがございましたらコメントをいただきたいと思いません。

アブウ・ジャラ（マリ国教育識字国語省教育地方分権化／分散化支援室室長）

ありがとうございます。私たちが話したことをモデレーターが非常にうまくまとめて下さいました。もちろん国によって実情は異なります。同じことを話していても、現場ではすべて違うということを忘れてはなりません。

分権化という考えは、権限をシェアするということです。当然それは、国家と地方の間で、領土的な全体性を保ちながら行われるもので、すべてはどの程度シェアするかという問題につきます。パイロット・プロジェクトの段階では概ね成功しますが、プロジェクトの実施者が去ると、私たちだけが残され、実験は破綻します。私の国では実験段階ですべての要素を厳密に調べようと努力します。成功するとすぐ、「これだ」と思うわけですが、そうはうまくいきません。実験は重要です。実験をすることで、すべての人々の責任がわかります。この勉強期間に様々なことをしっかり学ぶことが重要です。その後は経験を普及するために懸命に努力しなければなりません。

地域社会と共に学校を管理運営することも非常に重要な要素です。まず地域住民が学校をどのように考えているかを知りましょう。もちろんお金の要因がありますが、特に重要な要因は、地域住民が学校の重要性を理解し、地域レベルでも何かできることに気づいていることです。それが地域と学校との連携の出発点となります。これらの要素が特に重要だと思います。

ワライポーン・サンナパボーン（タイ国家教育委員会国際教育部部長）

吉田先生、ありがとうございました。ジョムティエン（タイ）の世界宣言にうたわれた「万人のための教育（EFA）」を達成するための取り組みについてお話ししたいと思います。ちなみにジョムティエンで今年の3月22日から24日にかけて再び「万人のための教育」会議が開かれ、この20年間で各国の基礎教育の就学率がどのように向上してきているかが検討されます。

タイの教育改革は、教育の質を改善すること、学校へのアクセスを高めること、学校改善のために地域の資源を動員することの三つを主要な目的としています。私たちは各地域に適した方法で学校改革や学校と地

域の連携に取り組むことを全国的に推進しています。成功事例はベスト・プラクティスに指定します。成功からも失敗からも学び、教員・学校・地域が話し合う場を組織し、経験を共有します。このような場をコーディネートする中心的な組織が必要です。それがなければ、関係者は互いに会おうとはしません。私たちは知識管理（KM）の手法を用いました。成功事例を共有するという方法です。これによって、成功例や失敗例について互いに学べるようになり、地域の教育の質を改善するために真摯に協力する姿勢が醸成されています。もちろんEFAの達成は学校だけの責任ではありません。社会全体のすべての構成員の参加が必要です。特に保護者の参加が欠かせません。保護者は常に他のどの関係者よりも重要な、教育の直接的な利害関係者です。国内における実施についてみると、タイでは教育関係者が経験を共有する多くの場を提供しています。

タイ以外の国にも目を向けたいと思います。私はマリとニジェールの成功例をお聞きし、私たちもこのような国際的なコラボレーションが必要だと思いました。東南アジアでも経験を共有し、広域で取り組むことができます。ASEAN共同体が2015年の設立を目指しており、経済・政治・文化・社会など様々な領域において協力が広がることを期待しています。教育協力も取り組むべき主要な分野の一つであると思います。必ずしも他の大陸に目を向けなくとも、近隣諸国と教育協力を通じて平和裡に共存することを目指せると思います。私のかつての指導教授だった村田先生が、今日のフォーラムに参加下さいました。私は村田先生から教育開発のための国際協力について指導を受けました。私は自分が引退する前に、先生が私に提案下さったことを実行したいと思います。それで私たちは近隣諸国との協力を着手し、マリ、ニジェール、ジンバブエなどのアフリカ諸国とも経験を共有したいと考えています。実際に会わなくとも、ICTを幅広く活用できます。JICAにも、私たちのためにフォーラムを組織し、協力がスムーズに行えるよう支援いただけるのではないかと思います。嬉しいことにICTを利用すれば、それほど資金がかかりません。

このフォーラムは意義深く有益だと思います。今後も続くことを願っております。文部科学省、外務省、広島大学、筑波大学、JICAに対し、このフォーラムを組織し多くのことを学ぶ機会を提供下さったことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

水本徳明（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）

一般的に、イノベーションというと、イノベーターにはイノベーションの目的がわかっていないことがあります。主要な目的を明確にすること、つまり「意味形成」が重要です。パイロット段階ではおそらく「意味形成」がなされ、それが重要だと認識されていると思います。しかし事業をより一般的に実施するときには、最初のパイロット段階をそのまま真似るべきではありません。対象地域の妥当性を考慮しなければなりません。なぜ地域は学校と連携する必要があるのか、学校側もなぜ地域と連携する必要があるのか、を考えなければなりません。これが教育のイノベーションに関する研究の大きな成果になるはずだと思います。地域と学校の連携を構築するには、全体的なフェーズのどの段階に我々はあるのか、何の目的で実施しているのかを明確にする必要があります。幅広い視点も重要です。関係者の間で意見の対立があるかもしれませんが、対立を好機とするべきです。対立を抑え込むのではなく顕在化すべきです。「意味形成」のプロセスでは、このような対立を乗り越える必要があります。

今日は様々な経験を共有し、幅広い視点でこのテーマについて討議してきました。非常によい「意味形成」のプロセスだったと思います。学校改善のために、このようなプロセスを続けることが必要だと思います。ありがとうございました。

ジェラルド・W・フライ（米国ミネソタ大学教育人間開発校組織リーダーシップ・政策・開発学部教授）

まず、インド、マリ、ニジェールにおける素晴らしい改革について、より深く理解できるようになったこ

とを、新しい同僚の先生方に感謝申し上げます。最後にもう少しだけ付け足したいと思います。

討論の最後に、石井教授とワライポーン博士が穏健な中央集権、穏健な分権化について発言されましたが、非常によい考えだったと思います。私の国では分権化が行き過ぎて、極端な不平等を生んでいます。

また特に重要だと思うのが、二つの E、すなわちエンパワメント（Empowerment）と公正（Equity）です。財政的な責任に関しても多くの討議がなされました。国か地方かという二元論的な考えを超えなければなりません。教育は非常に重要です。教育の質向上のために、国家も地方自治体も最大限の財政的貢献をしなければなりません。

今朝、ジャラ教授は共同責任を力説されました。その考えに同感です。政府だけでなく、多くの人々が教育の責任を担うべきです。

ゴヴィンダ教授は、インドでは驚くほど多様な言語や文化があると話されました。分権化によって言語や文化の多様性を守ることに貢献できると思います。

最後に、二つの C、すなわち Creative Collaboration（創造的な協力）が重要です。タイの国家教育法のすばらしい理想、すなわち教育のための万人、万人のための教育を実現するために、創造的な協力が地域のすべての重要な関係者の間で構築されることが不可欠です。

参加者の皆様からも深い洞察と有益な情報に満ちた質問をいただき感謝申し上げます。

R・ゴヴィンダ（インド国立教育計画行政大学学長）

このかけがえのない特別な機会をいただき、広島大学と日本政府に感謝申し上げます。私はこのように様々なご意見を拝聴して学んだことを研究生活の中で大切にしたいと思います。

私はこの会議から四つのメッセージを持ち帰りたいと思います。第一に、日本とタイの経験について知り、両国は地域社会の参加によってロジスティクスを改善し、資源を動員して人々の連携を構築しているという点だけでなく、地域社会が教育に参加することで地域自体がどのような影響を受けるかも考察している点についても、はるかに先を行っていることがわかりました。地域社会と学校との連携はさらに検討の余地があります。これをどこでもやれるとは思いませんが、インドでも日本の取り組みのいくつかを活かせる学校があります。

第二に、アフリカから参加された先生方の話をお聞きし、学ぶところが多くありました。今日のフォーラムの内外で様々な討議が行われ、それをお聞きしながら、両国で何が行われているか、より深く理解する機会を得ました。そして特に、日本がアフリカにおける教育開発にどのように投資しているかを知ることができたのは貴重な経験でした。この点について、私は個人的な興味もあることをこの際に申し上げます。実は私の大学は今、アフリカ全体のために、我々のような機関をアフリカに設立するようインド政府から要請されています。そのため、アフリカで起きていることや、どのように日本がアフリカの教育開発のために時間や資源を投資しているかをお聞きすることは、私にとって非常に興味深いことでした。アフリカの皆様だけでなく、日本の皆様ともぜひ協力をして、特にアフリカの教育投資の政策立案と管理においてどのように協力できるかを考えていきたいと思えます。

第三に、各国における多くの成功例や失敗例の経験をお聞きしながら、重要な教訓を思い出しました。つまり政府は全国を対象とする一つの政策しか打ち出しませんが、地域社会の参加でわかるように、その政策が必ずしもうまくいくとは限りません。万能策はありません。場所が違えば状況も変わります。そのことを考えなければなりません。地域参加のために妥当な政策を策定するには、多元的なアプローチを模索しなければならないかもしれません。

最後に頭に浮かんだメッセージは、現代の学校は特異な場所だということです。すべてが標準化されてい

ます。教員はすべて同じ資格を取得しなければならず、同じ時間に教室に行かねばなりません。教員は全国一律、同じ時間に勤務し、外から決められた同じカリキュラムを教え、同じような試験をしなければなりません。そういう学校に、非常に不均一な存在である地域を持ち込むわけです。地域住民は資格も経歴も期待も異なり、扱いも容易ではありません。学校の管理職や教員はみな、決められた時間に全員が同じ事をやるのに慣れてしています。地域の人々が来ると、教員たちが慣れている決まった日課が乱されます。それゆえ「キャパシティ・ビルディング」（能力向上）と言うときには何が本当に必要でしょうか。能力向上とはほとんどの場合、何をしなければならないか、どのようにするべきか、学校運営委員会はどのように実施するべきかなど、ある種の技能や知識の開発です。しかし私は、多様性を理解するという要素が大事だと思います。それが今日の討議の中で最も重要なメッセージだったと思います。多様性を容認するだけでなく、多様性を称賛するようになることが必要です。教員や校長はみな、保護者が学校へ来るのを仕方なく容認しているだけです。彼らは保護者に来てほしくないのですが、我慢して容認しているのです。多様性を称賛することを始めなければならないと思います。多様性を称賛して初めて、地域が学校で果たす役割の重要性を認識できると思います。この機会をいただき心より感謝申し上げます。

イボ・イサ（ニジュール革新的教育者協会（ONEN）代表みんなの学校プロジェクト現地チーフコーディネーター）

ありがとうございます。今日の討議を通じて、あらゆる場合において地域社会の参加が必要であり、地域のおかれた現状に合わせて地域社会の参加を図らねばならないということがわかりました。なぜなら地域社会の参加を考えると、地域社会自体を反映したものでなければ無意味だからです。同じ国の中でも人々のニーズが同じとは限りません。私たちが地域社会の標準化を強いても、うまくいくとは思いません。どのレベルでも、どの国でも、地域社会は常に貢献できます。

反対の意見については、今日はあまり取り上げられませんでした。これまでの経験では、最初、教員は地域の参加に非常に消極的でした。彼らは非常に集権的で、地域社会の参加は、学校教育の妨げになると思っていました。このことも大きな問題になりえます。教員は校内でとても重要な役割を果たしているからです。たとえば地域住民が食堂を手伝いたいと言っても、教職員がかなり反対した学校もいくつかあります。しかし、人々は理解し始めていると思います。これは後戻りできない動きです。この状況を評価した結果、教育省が介入して、学校評議会の中にディレクターが置かれるようになりました。そして教員は委員会のディレクターになれないとされました。そのようにしてこの問題を解決することができました。そうしなければ非常に運営が難しくなっていたでしょう。

先ほど申し上げたように、二週間後に再び西アフリカ諸国の情報を交換する会議が開かれます。これは今日のシンポジウムの延長線上にある会議で、今日のフォーラムで出された多くの新しいアイデアをその会議の場でも討議したいと思います。主催者の皆様に感謝申し上げます。教育問題は、すべての国に影響を与える社会経済問題です。それ故、このような討議をさらに広げていきたいと思います。ぜひとも解決策を見つけなければなりません。ありがとうございました。

吉田和浩（広島大学教育開発国際協力研究センター教授）

皆様、ありがとうございました。「一人の子どもを育てるのに村が必要」です。アフリカの諺と広く信じられているこの言葉は、ヒラリー・クリントンが1996年に書いた著書の題になったことで多くの人に知られるようになりました。このフォーラムに当てはめると、世界のどの国であっても、地域社会と学校の相互関係は昔ながらの問題であると同時に新しい問題でもあるということの意味します。

では、だれが地域のメンバーでしょうか。ここにいるすべての人々が地域のメンバーだと思います。そういう観点から、各国が直面しているこれらの非常に重要な問題にいかに取り組むべきか、私たち全員が考えなければならないと思います。今日のフォーラムでは、これらの問題にどのように対処するかについて素晴らしいアイデアが出されたと思います。

これによって第8回国際教育協力日本フォーラムを閉会したいと思います。主催者を代表し、ジャラ教授およびすべてのパネリストの皆様に熱心に討議いただいたことを感謝申し上げます。また、このセッションに最後までご参加いただいた皆様、そして、朝から長時間にわたって協力下さった同時通訳の方々にも感謝申し上げます。ありがとうございました。